

第6期あま市まちづくり委員会提言書

協働を通して実現したいあま市の姿と
協働促進のための事業案

はじめに

あま市は、2010年の合併以来、「協働のまちづくり」を行政のキーワードのひとつとして掲げてきた。当市では、市民や事業者による、地域のための様々な活動が展開されており、合併後も数々の活動が新たに生まれている。こうした市民活動をさらに盛り上げ、市民、事業者、行政の三者を軸とした「協働」の促進が、市の持続可能な発展を目指す上でも重要である。

あま市まちづくり委員会は協働を推し進める事業の一環であり、当市のまちづくりに対して、多様な立場で関わる委員による活発な議論がなされている。第1期から第5期まで、市民活動センターの設立、協働のガイドブック、ルールブックの作成といったテーマについて意見を交わしてきた。とりわけ第5期に出来上がった協働のルールブックを有効活用するためにも、より多くの人たちがまちづくりを「自分事」として捉え、地域に関われる環境を整えていく必要がある。第6期の主な議題は「協働を通して実現したいあま市の姿」。当市の現状、課題を整理すると同時に、今後必要と考えられる事業の案について話し合った。

この提言書では、第6期まちづくり委員会の議論の要点をまとめて提起する。行政だけでなく、市民や事業者も巻き込み、ここに示す案の具体化と実現に向けた動きが起こることを望む。

本提言書の構成

- 1 あま市における「協働のまちづくり」の現状と課題
- 2 「協働のまちづくり」促進のステップ
- 3 「協働のまちづくり」促進の具体案

1 あま市における「協働のまちづくり」の現状と課題

第6期まちづくり委員会では、各委員が「あま市の課題」、「あま市が目指す協働のあり方」について意見を出し合い、今後の協働促進を考える前提となるキーワードが見えてきた。

1) 地域や世代を超えた市民のつながりづくり

【現状】どんな活動にも市民同士のつながりは不可欠であるが、地域内での関わりの希薄化も実感される。

【課題】イベントの実施、世代間交流の場づくりなど、市民同士が楽しく気軽につながりを築ける機会が必要である。

2) 市民のつながりを基盤とした、常時、非常時両面の生活環境の整備

【現状】安全に、安心して、心地よく暮らせる地域づくりのために協働できる関係性の構築が十分ではない。

【課題】防犯、防災、環境美化（ゴミゼロ）などの取組や備えを、市民と一緒にできる状態をつくる必要がある。

3) 次世代へまちづくりを引き継げる協働の担い手育成

【現状】市民に協働への理解を広め、地域に関わる人の裾野を広げる必要がある。

【課題】子どもの頃から協働の意義を実感し、成長できる体験や啓発の機会を適切に設計することが重要である。

4) 市民が誇り（シビックプライド）を持てる魅力的なまちづくり

【現状】協働のまちづくりへの参加を促す、地域への愛着やあま市の担い手としての誇りを高めるべきである。

【課題】地域の魅力発信への注力や、様々な地域参加の機会の創出が必要である。

2 「協働のまちづくり」促進のステップ

前項の現状や課題を踏まえ、「協働のまちづくり」をさらに進めるためには、下記のようなステップに基づいて、施策を展開していくべきと考える。

ステップ 1-1

知る・学ぶ

- ・授業、セミナー、地域交流などで協働を学ぶ
- ・市民活動の情報を目にする
- ・市長との対話などに参加
- ・地域のイベントで遊ぶ など

ステップ 1-2

協働を体感する

- ・ゴミゼロなどの活動に参加する
- ・市民活動団体に加わる
- ・地域の催しを手伝う
- ・市民記者などまちの事業で活動する など

※ ステップ1-1、1-2は、いずれも協働に関わるきっかけを生む第一歩になると考える。

ステップ 2

協働を生み出す

- ・地域の課題解決に取り組む
- ・市の事業、地域の活動に関わる
- ・行政は市民と、市民は行政と共に活動を行う
- ・まちの課題や魅力を自発的に発信する など

3 「協働のまちづくり」促進の具体案

第6期まちづくり委員会より出された「協働のまちづくり」促進のための6つの案を提起する。
次ページよりそれぞれの詳細を示す。

- | | | |
|---------------------------|---------|---------|
| (1) 若い世代が協働に関わるきっかけづくり | 協働を知る | 協働を体感する |
| (2) 様々な人に向けた協働研修 | 協働を知る | 協働を生み出す |
| (3) 世代間交流を生み出すカルチャー教室 | 協働を知る | 協働を体感する |
| (4) 子どもたちと市長やまちづくり実践者との対話 | 協働を知る | |
| (5) 市民によるあま市のPR事業 | 協働を体感する | 協働を生み出す |
| (6) 協働を統括する行政の体制整備 | 協働を生み出す | |

なお、(1)、(2)など若い世代に関わる提案を中心に、学校関連の内容も多くなっている。ただし、この実現に向けて、学校だけの負担が増える形となっては協働の事業とはいえない。いずれの案も特定の主体だけでなく、多くの人の連携のもとに実現できる方法を検討すべきである。

(1) 若い世代が協働に関わるきっかけづくり

協働のまちづくりを持続可能なものにするために、次世代の担い手を生み出す取組が重要となる。児童生徒、学生など10代、20代も市民活動に参加しやすく、そこで達成感や学びを得られる施策を推し進める。

[内容]

・ボランティアスタンプカードの配布

市内の小中学生に、ボランティア活動に参加するとスタンプを集められるカードを配布。スタンプを集めるだけでなく、活動で得た気づきを記入する欄や、協働のまちづくりに関する知識や心構えを記した欄も設ける。

※ 参加した証はスタンプに限らず、シールやサインでも可。関わる人たちにとって負担が少なく、やりやすい方法を検討する必要がある。

※ ボランティアを受け入れる側の体制作りや勉強会の開催も必要である。

・ボランティア活動情報のリスト化と周知

市民が参加できるボランティア活動を一覧にし、情報を得られる機会を増やす。例えば、小中学生向けに学校で掲示するなど。

※ 親子で参加なのか、子どもたちだけで参加できるのかなど、参加資格を明確に記載すると良い。

※ 若い世代に限らず、大人向けにもこうした情報を市内各所で発信すると良い。

(2) 様々な人に向けた協働研修

協働についての理解を進めるための講座を、対象者ごとに内容を変えて実施

[内容]

・子ども向け協働講座

まちづくりやボランティア活動について学ぶ機会を設ける。ただ知識を得るだけでなく、まちの理想像や自分にできることを考えるなど、協働を自分事として捉えられる内容に

・先生向け協働研修

現在実施されている夏休みなどの学校教員の研修で協働に関する内容を盛り込む。学校での子どもたちへのボランティア活動参加時の指導などに役立つ内容に

※ 学校の負担が大きくなりすぎないように考慮した事業設計が必要

・市民活動団体向け講座・ワークショップ

すでに活動している団体向けに、協働の考え方だけでなく、ボランティア受け入れの心構えやノウハウなどをアドバイス、あるいはワークショップで意見交換する内容に

※ 例えば、ボランティア保険の利用、参加者とのコミュニケーションなど、実践的な内容も学ぶ

・保護者向けボランティア講座

ボランティアが子どもの成長にどうつながるかなど、保護者の理解を深める。親子でのボランティア参加も促す。

(3) 世代間交流を生み出すカルチャー教室

「全員が親戚になるまちづくり」を目指し、高齢者を中心に、市民がそれぞれの強みや興味関心を活かしたカルチャー教室を地域で運営する。

[内容]

・地域の先輩たちから学べる場づくり

現役をリタイアした世代の方に、将棋、料理、学校の勉強など、いろいろなことを教えてもらえる場を設ける。子どもたちがそこで学び、世代間の交流も創出する。

市民が主体となって運営し、講師育成や開催場所の確保などで行政の協力を得る。

※ シルバーカレッジや出前講座など、様々な市のツールや情報を収集し、一元化する。

※ 市民活動団体や地域組織など、様々な主体が講師となる機会を創出する。

(4) 子どもたちと市長やまちづくり実践者との対話

子どもたちがまちについて知り、意見を出す機会を増やすことで、よりまちづくりを身近なものに。出された意見を実現できる仕組みを整える。

[内容]

・まちづくりについて語り合える場づくり

現在の市長と子どもたちが語る会のように、行政関係者だけでなくまちづくりの実践者たちとの対話ができる機会をつくる。対話の相手は、市の職員やまちづくり委員会の委員など。

子どもたちの質問や意見を受け、実践へとつなげていく流れを仕組みとして整える。

対話の内容が、より市民の目に触れる発信方法を検討し、実行する。

※市長と語ろうあまの未来、ふれあいミーティングなどの機会を活かしていく。

※市公式SNSなどを積極的に活用すること。

(5) 市民によるあま市のPR事業

あま市の魅力をもっと多くの市民に知ってもらい、自分たちで発信できる機会をつくる。市内だけでなく、市外にも広めることによって、あま市の知名度を高める。

[内容]

あま市民によるあま市の魅力発信

- ・ SNS、YouTubeなどでのあま市の魅力発信に市民が関わる事業を展開

※ 日間賀島で小学校6年生がTikTokで発信を行った事例などを参考に

- ・ デザインや文章が洗練された情報は、発信力を高めると同時に、地域の印象自体も良いものに変える効果が見込まれる。ただ参加してもらうだけでなく、情報発信について、学べる機会などとセットでの実施も可能ではないか。

(6) 協働を統括する行政の体制整備

協働は、様々な分野の事業で実践できるものである。行政としても、単一の部署内だけでなく、市全体を俯瞰しながら協働を促進していく体制が欠かせない。協働事業を取りまとめる体制の整備を検討してもらいたい。

また、**本提言書に示す事業の具体化と実現に当たっては、来期以降のまちづくり委員会を活用するなど**、“協働を通して実現したいあま市の姿”に向けた体制の整備を検討してもらいたい。

おわりに ～まちづくり委員会より～

提言を踏まえ、

各委員がこれからまちにどう関わっていきたいか。

本提言書を踏まえてこれからまちにどう関わっていききたいか。

小林 優太 委員長

市民活動を通してたくさんのご縁をいただき、協働に関する啓発、ボランティア養成、若い世代の協働参加などに関わる機会もいただけてきました。今後も協働の意義や楽しさを多くの人に伝え、市民が「自分たちのまちだ」と胸を張ってまちづくりに参画できるあま市にしていきたい。

大西 純滋 委員

まちづくり委員会も12年経ち、まだあま市の姿が見えてこない。ステップ2にて私は考えるが、あま市の名は市町村の内で下から10位と悪く知名度が低い。あま伝統的七宝焼など学校をアートヴィレッジに作り、観光課と共に広げ、次世代に継ぎ、あま市まちづくりに対応したい。

佐藤 亮治 副委員長

私は、家業を通じて、子ども食堂など若い世代のボランティア参加の機会づくりをはじめ、世代間交流を組み込んだ食育事業の実施、また関係各所との協働による地域の魅力創出・発信など、様々な食文化の側面から勇健都市あま市の実現に向けて貢献してまいります。

青海川 祐城 委員

あま市商工会青年部、部長を今年度で終了することになり、もうこの委員会も卒業となります。提言書の内容を踏まえることよりも、まずは市民と行政、みんなが目指す目標、目的を明確にしていかなければいけないと思います。担当、委員会メンバーが変わりすぎでは。

本提言書を踏まえてこれからまちにどう関わっていききたいか。

カンデル サンデス委員

- 1 国際交流の促進 市が積極的に国際交流の場を提供することで、地域の国際的な魅力が向上する。
- 2 多言語対応の情報提供 観光地や市内の案内や看板が英語などで提供されると、外国人訪問者もより快適に過ごせて、これからの国際的なコミュニティの手助けになる。

副島 美貴 委員

私はあま市で子育て中のお母さんです。オーガニック給食を推進し、子どもの健康と地球の未来を考えています。まちづくり委員会では、市民の声を市長に届けました。今後はあま市が多くの市民の声を反映し協働できる魅力的なまちになるよう、貢献したいと思います。

北野 まり子 委員

ボランティア保険の詳しい制度を踏まえた上で、必ず保険に加入。保険を簡単に考えず、自分を守るのは自分。イベント保険は、その場でのみ保険。ボランティア活動は、厳しい状況に於いてもなにも考えずに奉仕が楽しく参加出来る。

竹嶋 秋光 委員

地元を良くしたい心構えが大切である。市民の顔を見てわが街の良さを伸ばしていく事が大切。まちづくり委員会に出会い投稿者の意志の強さに感動した。いろいろな環境を乗り越えて努力すれば達成できる身を持って示されている。現代のような時代の転換点で、私たちは普遍的な概念を追い求め、よりどころにしたい。だが、何気ない日常や日々移ろうものに目をとめながら、価値を見出す行為も重要だ。視野を広げる必要がある。

本提言書を踏まえてこれからまちにどう関わっていききたいか。

中島 鉄夫 委員

ゴミの収集や清掃の前にまず、ポイ捨て行為をしないことを提案します。ポイ捨て行為に対して、社会が許さない雰囲気を作るために警告、処罰、通報を行うようなシステムを行政、警察と協力して作成し、ティッシュや資料を配布するようなキャンペーンをしましょう。

三浦 あかり 委員

住んでいる地域の人と人が関わり、助け合う町にしていきたい。困っている人がいたら力を貸したい。

私が困っていたら力を貸してほしい。

あま市・住んでいる地域に、関心を持って「自分事」と思える人が増えて、みんなで支え合ってこの地域で生きていきたい。

原 一晃 委員

「協働のまちづくり」を自然に実践できる地域になるためには、より一層地域のつながりが大切と感じています。

「おはよう」や「いってらっしゃい」。地域で多くの会話が聞こえるつながりを深め、みんなでできるまちづくりに参加していきたいと思います。

溝口 紘 委員

自分のまちのことを自分ごととして捉え、当事者意識を持って関わっていきたい。

まちづくりの土台は地域であり、他の地域での活動にも目を向け、地域コミュニティの必要性・有用性を共有することがコミュニティの活性化に繋がると思う。

本提言書を踏まえてこれからまちにどう関わっていききたいか。

横井 三千代 委員

あま市には、まだ知られていない魅力がたくさんあると思います。子どもたちが地域のよさ、あま市のよさを感じることができるような活動やPRを地域の人々と協働して進め、温かい人間関係の中でつながり合うことで、よりよいまちづくりにつなげていききたいと思います。

横田 健司 委員

協働のまちづくりを実現するための中学校の役割は郷土愛を育てることだと考えます。良いことを継承するだけではなく、抱えている課題にも目を向けることができる生徒、積極的に地域の活動に参加しようという意欲ある生徒を育てていききたいと思います。

横山 亜矢子 委員

子育て支援を通じて、子ども達やその親にまちづくりを自分事ととらえていただくよう周知をしていきたい。

市のPR事業では、所属団体のSNSを活用することにより協働が可能。（小さなことですが）自らも情報発信を学び、市や団体の役に立ちたいと思います。

渡邊 みづえ 委員

高齢者が孤立することなく、地域住民や子供達との関わりを持ち、親子の繋がりが、地域と繋がることにより、お互いが勉強となり、全員が元気年齢を伸ばし、笑顔あふれるサロン、ふれあいカフェを開催し、行政・地域・住民・子供達を暖かい心で繋げる活動。